

エクリチュールの変容と「主体の構成」をめぐって —マーク・ポスター著『情報様式論』再考—

On the Transformation of Ecriture and the “Construction of the Subject”
—Reconsidering Mark Poster’s “THE MODE OF INFORMATION”—

前納 弘武

大妻女子大学人間生活文化研究所

Hiromu Maeno

Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women’s University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：エクリチュール，電子的エクリチュール，情報様式

Key words : Ecriture, Electic Ecriture, Mode of Information

抄録

現代の人々は、いわゆる「活字」に接する機会は極度に減少し、スマホやパソコンの画面に表示される電子的文字を読むことが大半になった。本稿では、電子的に表示される文字を「電子的エクリチュール」として位置づけ、その人間形成すなわち「主体の構成」への影響を考察する。いわゆるネット社会における電子的エクリチュールにおいては、文字のみならず、同時に、映像あり写真あり音声ありショートストーリーの動画あり、それらが渾然一体となってひとつの表現物を構成している事例が多い。対する活字のエクリチュールの場合、文字という単一の媒体からのみ成り立ち、一部に写真が付随する場合があるものの、音声や映像や動画等の要素が入り込む余地はない。この両者の違いは、伝達媒体の技術的進化の問題であるのみならず、受け手にとってはそれぞれ全く異質な「言語的経験」を迫られるものとみるべきであって、本稿では、言語的経験が異なれば、主体の構成もまた異ならざるを得ないという社会的事実の論証を課題とする。こうしたアプローチは、実は今から30年以上も前に、マーク・ポスターがその著『情報様式論』のなかで提起したものであった。かつてのポスターの問題提起に関して、現代の電子的エクリチュールの下での「主体の構成」、その実証的研究の幾つかを検証してみると、30数年前のポスターの指摘は、今になって現実の様相を示すようになったとみることが出来る。本稿は、その経緯と背景を論述しようと試みるものである。

1. 序・活字文化の衰退がもたらすもの

若者が新聞を読まなくなったと言われて久しい。この言葉をよく耳にするようになったのはもう何年くらい前になるだろうか。今では、若者のみならず一般の大人たちも新聞を読まなくなった。かつては、電車の中で新聞を読んでいる人をよく見かけた。朝の通勤時間など、混雑した車内で新聞をタテに四つに折りたたみ、隣の人を気付かいないが読んでいるサラリーマンがたくさんいた。しかし今では、車内で新聞を読んでいる人は滅多にいない。老若男女、スマホをいじっている人ばかりである。車内の座席は大体7人掛けだが、その

7人全員がスマホとにらめっこしている光景も珍しくない。数年前には驚いたものだが、今では向かいの7人もスマホをいじったりしていて、驚きを通り越して当たり前の風景になった感さえある。

なぜ、人々は、新聞を読まなくなったのか。その答えは簡単である。インターネット社会になったからである。これまで新聞で読んでいたニュースはすべてネットで読むことが出来る。それもネットで読むニュースはタダで読める。これが最も大きな理由だろう。もちろん、全てのニュース・サイトがタダではない。もっと読みたい場合は有料会員に登録しなければ「全て読む」ことはできない。

しかし無料で読める範囲で世界の大勢はほぼ了解することができる^[1]。

そのため、新聞の購読部数もめっきり減り、発行部数も激減の趨勢にある。新聞の発行部数の減少だけではない。活字の本も読まなくなった。本の方は新聞よりもまだマシで、時々車内で本を読んでいる人を見かける。しかしめっきり減少したことは間違いない。週刊誌や月刊誌の発行部数も減少し、いつの間にか廃刊に追い込まれているケースも少なくない。日本で最古の総合週刊誌の位置を占めてきた『週刊朝日』も、2023年5月末をもって休刊し、大正11(1922)年以来の歴史を閉じることとなった。2022年12月の平均発行部数は74,125部であったという。新聞社に負けず劣らず、出版事業も衰退の一途を辿っている。

今や活字文化の衰退とともに、活字に代わって、電子の作用によって表現される文字が氾濫している。今日、人々が何を読んでいるかと言えば、活字ではなくスマホやパソコンの画面に現れる「電子文字」を読んでいる。各種サイトのニュースを読む他に、写真や動画を見たり、ゲームに興じたり、メールをしたり、チャットをしたり、スマホやタブレットの使い方は多様であり、そこでは、様々な構成された動画や画像とともに電子文字の群れが踊る。近代社会を牽引してきた「活字文化」を凌駕し、それに代わって、「電子文字の文化」というべき新たな文化が勃興してきたわけである。

ここに、「電子文字」というのは、スマホやパソコン、タブレットなど、電子メディアのなかに表現された、コンピュータ用語を持ち出せば、電子メディアのなかに「打ち込まれた」文字を指す。今や、人々は、電子文字を「読む」方が圧倒的に多くなり、旧来の印刷媒体によって刻印された活字文字を読むという行為はめっきり少なくなってきたわけである。

なぜ、人々は、電子メディアに惹き付けられるのか。ニュースを読むという行為に関しては、先にタダで読むことができるからと書いた。しかし、スマホやパソコンなどの電子メディアは、そうした経済的な問題以上に、いまひとつ見逃すことのできない理由がある。今更述べるまでもなく、電子メディアは自分で「書く」ことができるメディアであり、自分の書いたものを「発信」できるメディアであるという特質が大きい。電子メディアは、読むだけではなく、自分の意見や感情を書き込み、

特定の対象だけではなく、不特定の人々、つまりは、一般社会に発信できるメディアなのだ。それも、匿名で。今や「書き込む」という行為も、ただ文字を書き込むだけではなく、自分の撮影した動画を加工して、自分の作品として発信することもできる。動画投稿サイトも数種に上るが、そこには面白おかしい動画が満載である。

文字にしても、動画にしても、スマホは自己の表現意欲を直ちに充足することのできるメディアに成長した。自分独自の「電子的エクリチュール」の作品を作ることも可能になった。活字的エクリチュールに代わって、電子文字や映像による自己の表現物をネットの中に作り上げることができるわけだ。活字による作品の場合は、個人が自由にメディアに掲載し発信することはできなかった。しかし、電子的エクリチュールの作品は自分の思ったとおりに投稿し、不特定多数の人々に発信し公表することができる。

そこで本稿では、「活字文化」や「電子文字の文化」という用語を避け、「活字的エクリチュール」に対して「電子的エクリチュール」という用語を用いる。「活字文化」という語に含まれる包括的な意味合いを避け、今少し分析の対象を鮮明にし、「読むこと」や「書くこと」に注目しながら論を進めたいが故である。

従来、この種の問題は、メディア論的アプローチを軸にして議論される傾向があった。しかし本稿では、メディアの特性それ自体よりも、メディアが構成する「エクリチュール」に注目する。強いて言えば、今日、社会学ないし社会情報学におけるメディア論はその射程範囲も拡がり、今や語り尽くされた感もなしとしない。何故、メディア論が隆盛を誇ったかといえば、ネット社会の到来とともにメディアの概念が拡張解釈されてきたからである。また、その必要もあったと言えるであろう。しかし、一旦、拡張解釈された概念を元に引き戻すことは難しい。それゆえ以下では、これまでのメディア論が対象化してきた現象をも含めて、改めて「エクリチュール」のカテゴリーを用いて捉え直そうと試みる。そこに登場する言葉が、「電子的エクリチュール」という概念であるが、昨今の「電子的エクリチュール」は、とりわけ現代の若者に対してどのような影響を与えつつあるのだろうか。

2. 表現行為の2類型とその変容

さて、人間にとって、言語による表現行為は、「話し-聴く」行為と、「書く-読む」行為の2つの側面、つまりは、パロールとエクリチュール（注）の2つの形態に分けられる。この2つは若者も高齢者も世代を問わず、誰にとっても基本的なまことに重要な2つの言語表現の行為である。通常、パロールとは「話し言葉（音声言語）」ないし「声によって話されたもの」を指し、エクリチュールとは「書き言葉（文字言語）」ないし「文字によって書かれたもの」を指す。人間は、この2種類の表現行為を柱として他者との関係を築き社会を構成しているわけである。

そのうち、パロールは身体器官の一つである「口」から言葉を発する行為それ自体であり、「口からの発語」という形態に関する限りは、時間的な変容は起こりえない。いつの時代も、「口」から言葉を発する表現行為は、言語そのものの変化はあれ、形態的には不変である。つまり、「パロールの変容」は起こり得ないといえるが、一方、文字の出現によって成り立つエクリチュールに関しては、その形態は時代と共に大きく変化してきた。ここに、2つの言語的表現行為の大きな差違が横たわっている。

そこで、エクリチュールの形態的な変容についてよく知られている知見を確認しておけば、文字の出現と共に可能になった「肉筆によるエクリチュール」に始まり、次いで「書写によるエクリチュール」、「木版によるエクリチュール」が登場し、その上に「活字によるエクリチュール」という具合に進化してきた。そして今や、人々は圧倒的に「電子的エクリチュール」に接触する時間の方が多くなってきたのであるが、このエクリチュールの形態的な変容は、人間の知覚や認識のあり方、つまりは人々の「知のあり方」に対して様々な影響を与えてきた。総じて言えば、エクリチュールの変容は、社会のあり方、人間のあり方、つまりは、人間という「主体の構成」を大きく変える力になってきたのである。

その点について敷衍すれば、例えば、活字印刷が織り成すエクリチュールは、近代社会の成り立ちに、その基盤を提供するほどの影響力を発揮してきた。周知のように、1450年頃、ヨハン・グーテンベルグが完成した活版印刷技術によって、ルネサンスや宗教改革、科学革命が可能になったと

いう言説は、E.L.アイゼンステイン著『印刷革命』以来、世の人々の常識となった^[2]。活版印刷と近代社会の関連について社会学に身近なところでは、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』という論考がある。アンダーソンによれば、印刷された活字の群れが織り成す書物は、「最初の近代的な大量生産工業商品」であった。その種の商品を産み出す資本主義と印刷技術の結びつきはプロテスタンティズムとも連合し、「ラテン語をほとんど知らなかった商人、女性をふくめ、大規模な新しい読書公衆を急速に創出し、かれらを政治宗教目的に動員した」。ここに動員された「ますます多くの人々が、まったく新しいやり方で、みずからについて考え、かつ自己と他者を関係づけ」、「新しい形の想像の共同体の可能性が創出された。これが、その基本的形態において、近代国民登場の舞台を準備した」のであった^[3]。

アンダーソンも指摘するように、印刷技術は「ラテン語を知らぬ人々」を読書大衆に仕立て上げた。さらに、最近刊行されたアンドリュー・ペティグリー著『印刷という革命』も、その点に注目し、ラテン語を知っているエリート相手よりも、一般向けに、俗語・地元語によるパンフレットやビラなど一枚刷りの印刷物が大量に販売されたという事実を掘り起こしている。その上、「購買者を惹きつけるには、人目を引く挿絵を載せるのが明らかに有効だったから、その成果を得るべく」莫大な投資が行われ、「ドイツで出版されたほぼすべての俗語聖書は、ふんだんに装飾を施されること」になった^[4]。もちろんラテン語の出版物も刊行されたが、ペティグリーによれば、1450～1600年にヨーロッパ全域で生産された印刷物の概要は、ラテン語の学術書 165,968部を凌駕し、俗語のもの 179,202部に達したという^[5]。

こうして書物は出版資本主義を促進させ、宗教改革、ルネサンスに至るわけだが、活字的エクリチュールと近代社会の関連というテーマに立ち返れば、この種の論考のなかで、ハーバーマス著『公共性の構造転換』を忘れるわけにはいかない。ユルゲン・ハーバーマスは、同書第2版刊行に際して「1990年新版への序言」を新たに草し、書物と近代の市民的公共性の関連をめぐって、次のように書いた。「ドイツでは、18世紀末までに「小さいが、批判的に討議をおこなう公共圏」が形成されていた。もうこの頃には、ごくわずかの標準的な

作品だけを繰り返し熱心に読むのではなく、つぎつぎと新たに出版されるものを読む習慣を身につけた人びとが、とりわけ都市部やその他の地域の市民層のなかから、また学者の共同体の枠を越えてそれを包み込むようにして、普遍的な読書する公衆をかたちづくった。それとともに、いわば私的領域のただなかから外部に出た、相当きめの細かい網の目をもった公共的なコミュニケーションも出現する^[6]。

ひとくちに読書とは言っても、当初は、「ごくわずかの標準的な作品だけを繰り返し熱心に読む」いうカタチであったものが、次第に、新しく出版される書物をつぎつぎと読むカタチに変容して行ったことがわかる。その延長上に、「普遍的な読書する公衆」が形成されていったのであり、アンダーソンやペティグリーも指摘していたように、「読書する公衆」の出現がなければ、理性を用いてあれやこれやを議論する啓蒙主義も存在しえなかったであろうし、ヴォルテールの名言とされる「私はあなたの意見には反対だ、だがあなたがそれを主張する権利は命をかけて守る」という言葉も残らなかったに違いない。

さらに、テレビ映像がいかに文字化された言葉を蝕んでいったかを糾弾して止まないニール・ポストマンは、「印刷物が幅をきかせていた文化では、公共の場でなされる討議は、事実はどうであれそれについての論者の考えがどうであるかが首尾一貫して秩序正しく配列されるという特徴を備えるようになる^[7]」という。すなわち、印刷された書物の文化、本稿にいう活字的エクリチュールのもとでは、論者の考えはどうかという点に関し、討議の側面においても論理的な首尾一貫性を示すように展開するというのである。

こうして、書物の文化は、論理的合理的な言説の世界を構築し、それが近代の民主主義的思考の母胎ともなってきた。しかし、近年の活字によるエクリチュールの衰退は、残念ながら、ハーバーマスのいう「公共的コミュニケーション」の活性化による「公共圏」の形成を衰弱せしめ、「読書する公衆」はその影を薄めて、論理的合理的な言説の世界それ自体も崩壊しつつあるかのようにみえる。その背後に、電子的エクリチュールの勃興が存することはいうまでもない。

電子メディアが人間や社会に及ぼす影響に関する論考も今ではかなりの数に上り、その分析視座

も多様であるが、ここに取り上げたい出色の一冊は、マーク・ポスターの『情報様式論』である。今でこそ、「電子的エクリチュール」という言葉はさほど珍しくはないが、ポスターは、今から30年くらい前にすでにこの用語を用いていた^[8]。

3. 行為論から言語論へ

M.ポスターの“The Mode of Information”は1990年に刊行され、翌1991年には早くも『情報様式論』と題して邦訳が出版されている。その10年後、岩波現代新書の一冊に入れられたが、新書版の解説を執筆した大澤真幸は、本書はコンピュータ導入以降のメディア環境の本態を「ポスト構造主義とも呼ばれたりする現代思想」との関連で解析することを試みており、この分野では「ほとんど『嚆矢』とも言うべき初期の仕事に属している^[9]」と述べている。確かに1990年刊行といえ、ポスターが目にしてきた電子メディア環境の本態は1970、80年代の現実であるが、時期的にみても如何にも早い論考だが、その後のこの分野の研究は、「本書が蒔いた種が成長してできた実りを刈り取るようにして為されてきた^[10]」と大澤はいう。

そして今、本稿もまた30年以上も前のポスターの蒔いた種から成長した実りを刈り取ろうと試みるものであるが、それだけの理論的価値を多くの研究者が認めてきた理由に関して、大澤は「着想の自然さ」に求めている。すなわち、本書で取り扱われるポスト構造主義の現代思想家、ボードリヤール、フーコー、デリダ、リオタールのいずれの場合も、読む者の誰もが着想するような具体的な事象と結びつけて論じている。大澤はこの姿勢を「着想の自然さ」と評して、その後の電子メディア研究の流れに大きな影響を与えてきたと言う^[11]。

確かに、そうした見方もあろうが、しかし「着想」の問題以上に、筆者は、M.ポスターの電子的なエクリチュールの分析視座が内包している普遍性、この普遍性を超えるパースペクティブをその後の諸研究が提出し得ていないという事実、ここに、ポスターの情報様式論がその後30年に渡って様々な影響を与えてきた遠因があると考えられる。

では、約30年前のポスターの分析視座とはどのような内容であったか。その要点は、コンピュータを軸とする各種の電子的装置の社会的浸透は、基本的に、「新しい言語経験」を迫るものと捉える点にある。電子化の下での新しい言語経験は、こ

れまでの普通の話し言葉や書き言葉とどのように異なっているのか、この違いの意味とは何か、という基本的問題に立ち返るところにポスターの出発点があった。つまり、ポスターは、電子的エクリチュールのもたらす言語経験は、生れたばかりの新生児が人間の言語環境のなかに放り込まれるように、現代の人間はこれまでとは違った全く新しい言語環境のなかに放り込まれる状況にあり、こうした事態は、それ以前の活字的エクリチュールのもたらす言語環境、言語経験と同じであるはずはない。では、両者の違いをどのように捉えればよいのか、この問題をポスターは、主体を取り囲む言語のあり方の問題、その時々々の言語状況がその場の人間の経験にあたえる影響を中心軸に設定しながら、「電子メディア環境の本態」にアプローチしようと試みる。

こうした視点に立って、現代社会の根本的な変化を考察するに際しては、従来、その中心的視座に置かれてきた社会的行為論を後景に退け、新しく言語論のレベルに立脚して考察すべきというのがポスターの提起した方法であった。活字的エクリチュールから電子的エクリチュールへの転換に伴う社会や人間の研究においては、これまでのように社会的行為論ではなく、言語論的アプローチへの転換が必要と主張するわけである。

この視座転換をめぐる、ポスター自身は、『情報様式論』序章を「何も語らない言葉」という逆説的なタイトルを付して次のように述べている。

「私は、現在の社会が行為に中心を置いたモデルによってアプローチされるべきではない」^[12]と考える。その理由は、「社会のあり方が私にはますます、言語の自己-指示的な様相を強め、その上に広がる電子メディアによるコミュニケーションによって構成されるようになっていく」という指摘に続いて、「自由の拡大という目的のために物の世界を制御しようという理性的で自律的な主体の意志の道具として言語を心に描く代わりに、新しい言語構造はそれ自身を回帰的に指示し、指示性を崩壊させ、それによって主体に働きかけ、その方向を見失わせるような新しい仕方と構成するのである」(pp.34-35)と述べる。

後半はいかにも回りくどい表現だが、簡潔に言えば、現代のような電子メディア社会では、そもそも言語というものの働きが大きく変わってきており、従来であれば、言語は「理性的で自律的な主体

の意志の道具」としての役割を担い、その結果、「自由の拡大」を成し遂げてきたのであった、しかし、「新しい言語構造」すなわち電子メディアのコミュニケーションの時代となつて、言語はかつてのように言語本来の機能ともいべき「指示性」を失い、つまり、「何も語らない言葉」となつて主体に働きかけ、「何も語らない」が故に、目指すべき「方向を見失わせるような新しい仕方」で主体のあり方を構成してしまうというのである。その意味で、序章の表題「何も語らない言葉」という表現は、如何にも逆説的かつ象徴的な表現というほかはない。

このレトリックの中で、ポスターは言語の役割に関して2つの力に言及している。一つは、意志の道具、言い換えれば、意図的な行為の道具としての言語という側面、もう一つは、「語りかけられている主体とともに語っている主体を構成する形成的な、構造化するパワー」という側面である。前者は、言語の意味を通じた外的な力、後者は「何も語らない言葉」ではあっても、「主体に働きかけ、その方向を見失わせるような新しい仕方」で主体を構成する側面での、言語そのものの内的な力と区別することができる。

いつの時代も言語はこの内的、外的な2つの力、有形無形の2つの力を作動させながら社会の原動力となり、その時々々の人間のあり方を規定してきたのであった。例えば、社会学的なパースペクティブにおいては、M.ウエーバー以来、社会的行為との関連で言語の役割を目的の道具として考える傾向が濃厚であったが、こうしたアプローチこそ、言語の外的な力の側面に偏った立論であった。これに対し、言語が人間形成の側面、主体の構成に与える内的な力というべき側面については不可視の現象故に問題対象に措定されることは少なかったのである。そこでポスターは「ポスト構造主義とも呼ばれたりする現代思想」に依拠しつつ、言語の外的な力の変容と内的な側面との関連性に焦点を当てようとするのである。

言うまでもないが、ここに摘出する言語の2つの力は、いつの時代も同じように、社会や人間に作用するのではない。この通時的な差異を明らかにするため、ポスターは、マルクスがいつの時代にも存在してきた「生産様式」の概念を用いて歴史を分割した方法に倣って、「情報様式」という概念を設定する。すなわち、「すべての時代は、意味

作用の内的外的な構造, 手段, 関係を含んだシンボル交換の形態を行使している」(p.12). つまり, いつの時代にもシンボル交換の形態は存在するものであって, これを「情報様式」と名付け, 次の3つの段階に区分する.

4. 情報様式の三類型

すなわち, 「対面し, 声に媒介された交換, 次に印刷物によって媒介される書き言葉による交換, そして電子メディアによる交換である. もし, 最初の段階がシンボルの照応によって性格づけられ, 二番目の段階が記号の再現・表象によって位置づけられるとしたら, 三番目は情動的なシミュレーションによって性格づけられるだろう」(pp.12-13).

この考え方は, 一面ではメディアの発展段階を示すものでもあるが, ポスターの視座にみられる普遍性は, それぞれの情報様式が有するシンボル交換の仕組みのメディア論的解明に留まらず, それぞれの段階において交換される言語が, 主体に働きかけ, その結果, 主体はどのように構成されるのかという問題を措定しているところにある. この点は, 先にみた言語の内的作用の領域であって, メディア論の射程外にあるというわけだ.

では, それぞれの段階において主体はどのように構成されるのか. この点についてポスターは, 先ず第1の「情報様式」である「対面し, 声に媒介された交換」の段階においては, 「自己は, 対面関係の全体性のなかに埋め込まれることによって, 発話地点として構成」(p.13)されるとする. 対面的な全体性の中で, 人々は, 発話者が誰であるかは誰の目にも明らかな状況のなかで, 社会内部に位置づけられるわけである. すなわち, 「部族社会の小さな共同体においては, 諸個人は誕生から「知られて」おり, 日常の経験によって同一性を再生産するような広大な親族関係の構造の中に組み込まれている. こうしたコンテキストにおいて, 主体は社会的であり, 相関的な自己として構築され, 再生産されている」(p.259)とみなすことができる.

次いで第2の情報様式の段階, 印刷物の段階では, 「自己は理性的/想像的自律性における中心化された行使者として構成され」(p.13)る. 先に触れたように, ハーバーマスの指摘する「読書する公衆」として, 公共的なコミュニケーションの担い手となりうるような主体の出現である. 但し, 書き言葉と印刷された言葉の段階では, 諸個人は

対面的状況における場合と同じように, 特定の個人として同一性を保持することは困難となる. つまり, 第2の情報様式では, 発話者が誰であるかは常に明らかになるとは限らない. これが, いわゆる「書き言葉としてのエクリチュール」それ自体の盲点になるわけだが, 多くの場合, 個々のエクリチュールには「署名」というものが付加される. この「署名」によって「実際の同一性は後から召喚することができる」(p.259)とポスターはいう. 発話者の「同一性はコミュニケーションから取り除かれるようになったが, 著者性は, たとえ筆名であっても, 同一性を固定する役割を果たし」(p.259), そのことによって, 人々は自律的主体として構成されるのである.

そして, 情報様式の3つ目の段階たる電子的段階においては, 「自己は脱中心化され, 散乱し, 多数化され, 常に不安定なまま」(p.13)に主体は構成される. 特にこのレベルにおいて, 電子メディアによるコミュニケーションは「強制的な効果」をもっているとして, ポスターは次のように敷衍する.

「語る身体から聴く身体への関係を遠隔化することによって, また読者あるいは書き手と, 印刷されたあるいは手書きのテキストの手で触れることのできる物質性との結びつきを抽象化したりすることによって, 電子メディアによるコミュニケーションは, 主体とそれが送信したり受信したりするシンボルとの関係を覆しこの関係を徹底的に新しい形態に再構成するのである」(p.29).

その新しい形態とは, 電子メディアによる「コミュニケーションの主体にとって, 対象は言語の中に表象されたものとしての物質世界ではなく, *signifiant* それ自体の流れとなろうとする. 第3の情報様式においては, 主体が *signifiant* の流れの「背後」に存在する「現実」を識別しようとすることはますます困難な, あるいは外的なこととなり, その結果社会生活の一部はメッセージを受け取り, 解釈するための諸主体を位置づける活動となるのだ」(p.29).

こうして, 「主体はもはや絶対的な時間/空間の一点に位置してはおらず, また物理的で固定された視点をもってそこから何をするかを合理的に選択判断したりはしない」(p.30). ここにおいて, 主体は主体自身の「理性的で自律的な主観性」に中心をもち, 定義された自我によって境界づけられて

いると考えることができない。そうではなく、私は社会空間を横断して崩壊しており、覆され、分散しているのである」(p.31)。このように、第3の電子的な情報様式においては、語る身体と聞く身体ないしは読む身体との関係を非物質的な抽象化された結びつきに化してしまう。

活字印刷によるエクリチュールの書物の場合、全体の装丁からタイトルや本文の活字の形、各ページのレイアウトまで、個性的な物質性に覆われた関係が成り立っていた。新聞の場合も、各紙の個性的な紙名のデザインに始まり、見出しの活字の大きさ等が物質性を形成し、読者との関係を取り結ぶ重要な要素となっていた。しかし、電子メディアにおける書き手と読み手の関係は、互いに画面に点滅する電子文字を見つめるだけの関係しか成り立たず、すべてのコンテキストは脱落してしまうのである。そこには、書物にみるような個性的、物質的な交流はない。発信者と受信者の交流は、ただ情報の交換しか存在しないのだ。

従って、そこでのコミュニケーションは、ポスターのいうには、情報世界だけの結びつきであるが故に、物質的結びつきを失った主体は、*signifiant* 自体のなかに置かれて、その背後にある現実が見えなくなってしまうというのである。そこに現れる主体像は、従来の自律的な主体ではない。ここでは自律的な主体は崩壊し、個別の *signifiant* の世界に分散してしまうとポスターはみているのである。

5. 言語のラッピング

言うまでもなく、*signifiant* は *signifié* と表裏一体となって、言語の表象機能を担っている。通常、日本語では能記と所記と呼ばれる言語記号の2つの側面、別言すれば、表現と意味のセットが「物質的な交流」を基にした密接な関係にあればあるほど、表象機能はより強化される。ところが、*signifié* と *signifiant* の一体性が崩れ、両者の乖離が露わになればなるほど、言語は本来の指示性を失うために行為の道具としての有効性をも失ってしまう。

前項にみたポスターの言う第3の情報様式においては、まさに、*signifié* と *signifiant* の溝が深まり、主体は、*signifiant* の流れの中に巻き込まれ、自らの置かれた「現実」を識別できなくなる、とポスターはいう。ここに彼は、エクリチュールの変容による主体の変容という問題、その一端に踏み込ん

でいるわけだ。

この場合、主体の変容の契機となる「物質的交流の喪失」という問題は、活字的エクリチュールから電子的エクリチュールへの変容に伴う、いわば媒体の変容によって避けることのできない現象として主体の前に出現する。その意味では、技術的な側面での変容に留まっているとみるべきであり、その限りでは言語論的要素はまだ入り込んでいない。ところが、「物質的な交流」を失い、「情報的世界だけの結びつき」に変貌し、実際に言葉の交換という段階になると、*signifié* と *signifiant* の一体性が崩れ去っているために、言語は本来の指示性を失うというのがポスターの論理構成である。このとき、技術的側面と言語論的側面はただ分析的に区分しようというのみであって、実際の電子的エクリチュールにおいては、両者は不可分に結びついたメカニズム（構造）として作用する。

このメカニズムの特に言語的側面を指して、ポスターは、「言語のラッピング」(p.17)と呼んでいる。この造語を用いて、ポスターは、コミュニケーションのパターンにおける変化が主体における変化を含んでいるそのあり方について探求し、「言語の布置、あるいは、ラッピングにおける変化は主体が記号を意味に加工するやり方、その文化的生産に関する微妙な問題を変化させる。音声あるいは印刷物によるラッピングをされた言語から電子的にラッピングされた言語への移行は、したがって主体の世界との関係を再-布置化しているのだ」(p.22)と主張する。

つまり、誰しも経験済みの端的な例を示せば、「私はあなたが好きです。」という音声でラッピング（装飾）された言語が、電子的にラッピングされた「私はあなたが好きです。」という言語になると、受信者の立場にあっては、「主体が記号を意味に加工する仕方」において微妙な差異が生じ、そのために主体が相手と関わる場合の実際の関わり方、更には、主体と世界との関わり方を変えてしまう事態となる。実際、恋文の場合を考えてみれば明らかのように、肉筆で書かれた手紙を読むときと、同じ文面をワープロで作成された手紙を読むときの感慨の違いは、ポスターが「言語のラッピング」という側面において歴然たるものがあり、差出人と私との関係は質的に大いに変わりうる可能性を有するであろう。肉筆とワープロでは、相手の人柄の違いやその後の両者の関係のあり方にも影響

しかねない微妙な問題をそこに見出すことは決して困難ではない。また、直接、声に出して伝える電話とメールで伝える場合の「言語のラッピング」もまた、現代人であれば日常的に経験するところであろう。

こうした事例の場合、従来は個別メディアの特性の問題とされてきたが、ポスターは、メディアの技術的側面に終始せず、そこに言語論的視点を導入することによって、「言語のラッピング」という造語を用いながら、エクリチュールと主体の問題を取り上げる。そこにおいてポスターは、「主体がコミュニケーションの行為と構造の中で構築される」というテーマをポスト構造主義者たちから引き継いでいるのである。

6. エクリチュールの概念

その際、エクリチュールの概念について、ポスターは、記号論的哲学者 J. デリダの所論を援用する。言うまでもなく、通常、エクリチュールといえば、「書き言葉ないし書かれたもの」を指し、「話し言葉ないし話されたもの」を指すパロールとは区別して用いられる。

しかし、デリダの哲学において、エクリチュールの概念は、話し言葉すなわちパロールの対岸に位置する概念ではない。この中枢的な問題について、ポスターによれば、「デリダの使う用語としてのエクリチュールは話し言葉と対立するものではなく、話し言葉と書き言葉の区別に先立つものなのである。話し言葉は、いつも既に著者と真理の非-同一性に取りつかれており、いつも既に『エクリチュール』なのだ」(p.228) という。

さて、ここにいう、「話し言葉は、いつも既に著者と真理の非-同一性に取りつかれており、いつも既に『エクリチュール』なのだ」とはどういうことか。このデリダに特有の命題は、しばしば指摘されるように、プラトンにまで遡るパロールとエクリチュールの二元論の克服を目指すものであったが、これについても、ポスターは、次のように解説する。すなわち、「プラトンは、理念的な実在がその心的な表象と完全に一致するような心的な経験として真理を定義しようとしたために、そしてまた別の言葉で言えば、われわれが『真理』と呼んでいるものを求めていた限りにおいて、書き言葉を信用しなかったのである。こうした心的経験からの距離において、書き言葉は話し言葉に対立し、

心的経験からの一定の距離が必ずつきまとうのである」(p.227)。このプラトンのアイデア実在論にみられるように、「言葉が精神に対して、精神が実在に対して、そしてこれら三つすべてが完全に現前する」という認識が、西洋の理性主義的文化の基盤を提供してきたのであった。

他方、西洋の書き言葉すなわちアルファベットは、単なる表音文字にすぎない。そのため、デリダのエクリチュール論に大きな関心を寄せたイスラム学者井筒俊彦によれば、アルファベットは「パロール（の「能記」的側面）を、そのまま書き写す道具にすぎない。大切なのは、写される音声であって、写す道具自体には価値がない。…しかも、文字に転写される時、生きた言葉は、そこに現前するロゴスを失って死物と化す。こうして、エクリチュールは「抑圧」され、さげすまれる」^[13] という。

その意味において、西洋理性主義文化は、音声中心主義のうえに成り立っており、そこで議論される「真理」とは「客観的意味の実在」を指すに他ならず、そうした「客観的意味の実在」が心的経験と完全に一致するという文脈において、西洋思想はロゴス中心主義ともみなされてきたわけである。しかしデリダは、その西洋的な伝統の「脱構築」を試み、パロール優先思想、音声中心主義を批判する。その批判の論拠は、いわゆるパロールにおける「客観的意味の実在」としての「真理の現前性」の否定であった。

この点に関して、先の井筒俊彦は、「デリダの構想するエクリチュールの世界は、『現前』の不可能性を特徴とする。有形であれ無形であれ、いかなるものも現前することはない」^[14] と述べ、フッサールとの関連において、次のようにまことに明解にその経緯を解説する。

つまり、「話者が口を開いて何か言う。言いながら、彼は自分の言葉を耳に聞き、そのままそれを了解する。この理解は直接無媒介であって、その瞬間、彼のこころ、つまり「意味」は、絶対的直接性において彼の意識に現前している、とフッサールは言う。ロゴスの現前。だが、ここにおいてすら、デリダはロゴスの絶対的現前を否定する。発声と「意味」了解との、ほとんど間髪を入れぬ接合点にも、彼はかすかな遅延を見るからである。こんな微妙な一瞬にすら、彼は「相異」＝「相移」の介在を見るのだ。現前する（かのごとくに見える）ロゴスは、実は純粹に現前してはいない。発声と

了解との間の目にもとまらぬ間隙に、無がしのびこむ。より一般的に、すべての有のなかには、始めから非有が浸透している。非有によって浸透された有は、もはや有ではなくて、有の「痕跡」である」^[15]。

ここに、井筒によって開陳されたデリダの見解は、最初期のフッサール批判以来、終始一貫して強調してきており、いわゆる彼の提起した命題は、「現前性」に関するフッサールの見解に対するアンチテーゼとして提出されたものであった。

こうして我々は、話し言葉、パロールのなかの直接的な現前性、フッサール以来、「現前するもの」とされてきた「実在的意味」は、わずかな「遅延」によって、有の「痕跡」と捉えるしかないことを知らされる。ここにおいて我々は、先のポスターの指摘するデリダの命題、「話し言葉は、いつも既に著者と真理の非-同一性に取り付かれており、いつも既にエクリチュールなのだ」(p.228) という命題に戻ってきたわけだ。

エクリチュールは、「心的経験からの一定の距離」によって「現前性」は従来から否定されてきたが、パロールもまたデリダによって、「現前性の不可能性」が論証され、両者の境目は、強いて結論的にいえば、「恒久的に揺れ動いており、いずれも別のものとの関係において固定することはできない」(p.229) とみるのが妥当であり、パロールもまた、「著者と真理の非-同一性」に取り付かれているわけだ。

かくて、デリダはエクリチュールの概念を包括的に捉えて、次のように定義する。「表記が文字的であろうとなかろうと、またたとえそれが空間内で配分するものが声の秩序とは無関係な物—映画書法、舞踊書法は勿論、絵画的、音楽的、彫刻的な〈書法〉(エクリチュール)などに至るまで—だとしても、表記というものを惹き起し得るあらゆるものを示すために、〈エクリチュール〉と言われるのである」^[16] と。

エクリチュールに関するこの定義によれば、デリダは、「表記というものを惹き起し得るあらゆるもの」を示すために、〈エクリチュール〉の概念を用いると述べており、従来の考え方からすれば最も広義の定義とみることができる。さらにデリダは、今日、生物学者たちも、「生きた細胞内の情報の最も基本的な過程に関して、エクリチュールとプログラム(前=文字)を語るのである。け

つきよく、本質的諸限界をもとうともつまいと、サイバネティックスのプログラムにおおわれたあらゆる領域は、エクリチュールの領域であるだろう」^[17] とも言う。

この定義を公にした『グラマトロジー』の刊行は著者デリダ 37 歳、1967 年であった。当時はまだまだコンピューターリゼーションの波もさほどではなかったが、ポスターに言わしむれば、「デリダの仕事にとってコンピュータのエクリチュールとは、マイナーだが重要でないわけではないテーマ」(p.224) であった。若きデリダにとってはコンピュータのエクリチュールの問題は未だマイナーな問題でありながら、重要な問題として認識されていたのであり、その内容から見れば、今やメジャーな問題になった 50 年後のネット社会の現実を見越したエクリチュールの定義と見なすこともできる。

7. 電子的エクリチュールの世界

今、改めて考えてみれば、デリダの以上のエクリチュールの定義ほど、現代ネット社会における電子的エクリチュールの特質を考えるに最適な定義はない。今やネットの中に「表記されるものの全て」は人々の前に現れるエクリチュールであり、実際、ネットの中には、「音声言語や文字言語は言うまでもなく、映画書法、舞踊書法は勿論、絵画的、音楽的、彫刻的な〈書法〉」などに至るまでありとあらゆる〈書法〉が入り乱れている。その現状にいささかでも踏み込めば、映画とか舞踊とか、個別のジャンルのみを対象にして、電子的エクリチュールを語ることはむしろ無意味というべきであり、映画からダンスから音楽から絵画から、そして、音声言語・文字言語に至るまで、融合一体化したエクリチュールがそこに出現しているのが実態である。一旦、ネット社会に入れば、画像あり、動画あり、音楽あり、文字あり、音声あり等々、それら全体が、まさに新しい言語環境としてユーザーに、新しい言語経験を迫っているのである。

その「新しい言語経験」は、まず最初に、文字を「書く」という行為におけるある種の違和感として経験される。というのは、普段、我々は、漢字と仮名の混じり合った文章を書くのに慣れている。ところが、ワープロの登場以来、そこに登場する電子文字の場合は、ローマ字ないし平仮名で打ち込んで、漢字仮名交じり文に変換する。この変換

は、機械のメカニズムに従うカタチで文章が出来上がり、結果的に、電子文字のエクリチュールがそこに構成される。だとすれば、電子文字が構成するエクリチュールは、従来の肉筆文字を活字化した結果、そこに出来上がるエクリチュールとは同質のものではありえない。その影響は、特に日本語の場合、漢字、平仮名、片仮名の組み合わせからなる文字システムを作り出した日本人の「書く」という意識の変質にも及ばざるを得ないだろう。

実際、今日では、文字を「書く」というよりも、キーボードに向かって文字を「打ち込む」という意識の方が強くなり、それも、思いつくままに、思考の重みを欠いたまま、つまり、深く考えることなく「打ち込む」傾向さえ日常的になり、そこに出来上がる「電子的エクリチュール」の中には「軽はずみな」言葉が氾濫するという現状も否定できない。

そうした「書く」という技法の変容から、半ば必然的に、次なる内容の問題が惹き起される。すなわち、思うがままに、あるいは、言うが如くに打ち込んで表現されたエクリチュールの中には、音声言語と文字言語が融合したかの如きことばが氾濫し、その種のことばは、過剰に感情性の溢れたことばを生み出す傾向が強い。こうした現状を鑑みて、ノーベル賞作家カズオ・イシグロは、マス・メディア社会に代わるネット社会は、真実の究明よりも感情の充足を重視する社会だとして、「感情優先社会」^[18] という形容を与えたが、筆者もまた、「情報社会は情動社会」という主題のもと、「電子文字のエクリチュール」に内在する感情性の横溢についてその問題点を指摘したことがある^[19]。

「感情優先社会」ないし「情動社会」のもと、今日、「電子的エクリチュール」は、個人の合理的判断に資する事実の解明よりも、個人の感情性の刺激に関連する場合が多々見受けられる。その典型的なケースの一つは、トランプ前米大統領のツイッターが発信するエクリチュールに求められよう。また、SNSによる他者への非難中傷のエクリチュールや、いわゆる多様性を認めぬ街頭での他者排斥のヘイトメッセージ等々、今日の「電子的エクリチュール」は人間の感情性を刺激するものが甚だ多い。

その方向性は、かつての「活字によるエクリチュール」が理性的主体を析出してきたメカニズムとは真逆というべきであり、現代の若者は、冷静

に読むことを要求される「活字的エクリチュール」よりも、感情性の横溢した「電子的エクリチュール」に接する方が圧倒的に多いのである。今や、「電子的エクリチュール」は、合理的判断を下し得る近代的個人の存在を侵食しつつあり、社会の至る所での非合理主義の発生を推し進めている。その背後には、いわゆる「電子的エクリチュール」には、感情表現に適した音声言語の要素が入り込み易い特性が潜んでいると言えよう。

「電子的エクリチュール」のなかに音声言語が入り込むということは、パロールとエクリチュールの二元的対立が理論的にも現実的にも崩れ、パロールもエクリチュールも活字文化の時代のような図式では考えられない問題性を内包するようになってきたとみなされる。

まさに、現代の「電子的エクリチュール」の世界は音声言語と文字言語が入り乱れ、敢えて言えば、そこに展開される世界は、「声としてのエクリチュール」もしくは「文字としてのパロール」とでも言う他はないような事態が頻繁に起こっている。現代のエクリチュールに関わる状況は、パロールもエクリチュールも、かつて経験したことのない複雑な事態がその内部に起こりつつある考えることができるのである。

実際、電子的エクリチュールの中に書き込まれた文字の群れは「読まれるもの」であるわけだが、本人の生の声が聞こえてくるパロールそのものと言ってよいほどの迫力を含んでいる場合が多い。その事例は、例えば、誹謗中傷のメッセージを受け取る立場に立たされた者の場合、口頭で相手を罵倒中傷するに匹敵した文言が文字で送りつけられてくる。さらに、匿名性ゆえに口頭で罵倒する以上の文言が電子文字によって相手に送りつけられる。その時、受け手が読んでいるのは文字ではあるが、ある種の「過激な」パロールとして、見知らぬ人の強烈な怒り声を聞いているかのような気分させられる。また、LINEに書き込まれる1, 2行の短いフレーズにしても、会話体の文字が、相手と自分の間で飽きずに延々と続く。特に、年若い女性に多いようだが、これも、恰も文字で会話しているような、つまりは、「文字としてのパロール」という形容が当てはまる現象と言えよう。

こうした現象をポスターの「情報様式論」に即して言えば、かつての活字的エクリチュールにおける言語のあり方は、signifié と signifiant の一体化

した言語として作用し、それ故に目的合理的行為を促すことができた。つまり、言語というものを目的合理的行為の道具として活用することができたわけだが、これに対して、電子的エクリチュールの場合は、感情性の溢れた言葉に取り巻かれて、目的合理的行為よりは感情的行為の誘発を促す。そこでの言語は *signifié* と *signifiant* の分離した単なる記号として作用し、言語の指示性は失われて、現実の方向性を確認することが難しい状況に変容してきたのである。

8. 主体の構成をめぐる

このように、活字的エクリチュールから電子的エクリチュールへの変容、この2つのエクリチュールの過程によって、主体はどのようにして構成されるのか、その違いはどこにあるのか、という問題がポスターの関心事項であった。その中核には、エクリチュールを構成する言語状況の変容という認識があった。ポスターの言う言語状況の変容を、本稿では、「言語の指示性の崩壊」、「*signifié* と *signifiant* の分離」として捉えてきたのであったが、こうした事象に関連した言説は、最近のメディアに関する研究のなかでも垣間見ることができる。その一つは、山口裕之著になる『現代メディア哲学—複製技術論からヴァーチャルリアリティへ』のなかに次のような一節がみえる。

ドイツ文学者であり、ウォルター・ベンヤミンの研究者でもある山口は、現代の社会と文化のあり方を決定的に規定しているインターネット環境のなかでは、「ウェブのはりめぐらされた世界の上でデジタル情報が飛び交い、それによって多くの領域で、もはや実体をともなった〈モノ〉ではなく、それ自体としては形をもたない〈情報〉が、交換されるべき価値として流通する。そこでは、本も音楽もニュースも貨幣も、〈モノ〉としてのかたちをとっていたかつてのメディアのメタファーとして、いわば仮想的なプラットフォームの上で動いていく」^[20]と述べ、「こういった高度な技術メディアは、単にわれわれにとって役に立つものとして生活のなかで「手段」として用いられているだけではない。新しいメディア技術が社会や文化のなかで支配的なものになってゆくと、場合によってはほとんど気がつかないうちに、人間の思考、生活、文化のあり方全般を規定するものになってゆく」^[21]と指摘する。

この一連の指摘も、今では特に目新しい内容ではないが、インターネット環境の中では、「もはや実体をともなった〈モノ〉ではなく、それ自体としては形をもたない〈情報〉が、交換されるべき価値として流通する」という山口の指摘は、まさにこれまで述べ来たった、*signifié* と *signifiant* の分離によって言語それ自体が本来の指示性を失った事態を指し示している。さらに、そうしたコミュニケーション技術を、高度であるが故に便利な道具として用いているうちに、「ほとんど気がつかないうちに、人間の思考、生活、文化のあり方全般を規定するものになってゆく」という指摘は、インターネット社会における「主体の構成」、その有り様を暗示しているといえよう。

その暗示の内実を多少とも具体的に分析しようとする試みは、近年、様々な言説のもとに展開されてきている。例えば、橋元良明による『便利な端末が私たちにしていること』と題した一文によれば、10代の若者では2015年時点でモバイルネットの利用時間がテレビを上回り、在宅時間の多くをネット利用に割くようになった。20代もコロナ禍の2020年の場合、ネット利用時間は一日あたり156.8分に達しテレビの121.4分を上回ってメディア利用時間の最長を示すようになった。その結果、どのような事態が惹き起されるかと言えば、先ず第1に「記憶の外注化」が顕著になるという。この傾向は若者だけではなく、便利な端末を使えば使うほど記憶力が薄れるという経験は誰しも共有するところであろう。次いで、特にネット利用時間の長い若者にとって重視すべきは、「関心領域の狭小化」にあるという^[22]。

橋元の調査結果によれば、10代20代の場合、ネットでやりとりされる情報は大半が友人や仲間との「たわいないおしゃべり」が多く、新聞はほとんど読まずテレビ視聴時間も短いということになれば、社会一般に関する情報への接触は減少していく。そのため、半ば必然的に「ネット浸りによる関心領域の狭小化」が起るといえるのである。さらにユーザーの関心領域は、高度な技術ゆえに、閲覧履歴をフォローし、年齢別、性別によってパーソナライズされた情報空間に覆われてしまう。ニュースの配信にしても、ユーザーの関心領域に応じた提示が行われて、「関心領域の狭小化」はより一層進行していかざるをえない。

人々の関心がますます狭小化ないし狭隘化して

行くということになると、言葉を換えれば、「自分の興味のある情報にしか接しない」傾向が濃厚になるということだ。自分と異なった興味・関心の持ち主達もまた同じような自己の「関心領域の狭小化」に陥れば、そこに、「社会の分断化」が生ずることは半ば必然である。その挙句に、民主主義の発展が阻害される結果を招きかねない。既にこうした事態は、昨今のアメリカ民主主義の変質にもみられるかのごとくであり、若年層の政治や社会的争点への関心の無さという昨今の日本の若者の政治意識にも影響していると考えられることもできる。

これらは、「便利な道具」を使えば使うほど「ほとんど気がつかないうちに、人間の思考、生活、文化のあり方全般を規定するものになってゆく」、まさに「便利な端末が私たちにしていること」の例証でもある。さらに橋元のいう「関心領域の狭小化」は、「同質的意見集団の形成」をも促し、他者の意見集団と対立してそれを排除する方向に作用しがちにもなるが、この種の問題に関連して、大澤真幸は、現代の若者にみられる「主体の構成」、その有り様について興味深い考察を与えている、関連部分を引いておこう。

「若者たちは、今、二つの方向の欲望の中に引き裂かれたような状況にいる。一方で、現代の若者は——いや若者だけではなく現代を生きるほとんどすべての人が——、ごく狭い内輪の、言ってみれば半径三メートル以内の親密圏に関してしか、真に納得のいく理解ができなと感じ、そのような内輪にとどまっていたいという欲求をもっているように見える。しかし、他方で、彼らは、内輪にしか十分な理解が及んでいないことに対して強い不充足感を覚えている。内輪や親密圏の外に、広大な〈世界〉が広がっていることを知っているし、その〈世界〉に自分たちの行動も感性も規定されているのを実感している。ところが、その〈世界〉なるものの全体像がつかめない。〈世界〉がどのような顔を持ち、どのような構造をもっており、何を意味しているのか、さっぱりわからない。けれども、〈世界〉が何であるかを知りたいし、〈世界〉とのつながりを実感したいし、何より、その〈世界〉において自らの存在を認められたい。そのような狂おしいほどの願望をも若者たちはもっている」^[23]。

ここに描かれているのは、「ごく狭い内輪の親密

圏」内部でしか「真に納得のいく理解ができない」若者が、そうであるが故に、そこに留まっていたい、と同時に、自分たちの行動や感性を外側から規定してくる〈外部世界〉がどのような世界であるかも知りたい、その上で外部との繋がりももちたい、できれば、全体の〈世界〉のなかで自己の存在をも認めてほしいという、2つに分裂した欲求のただ中に、現代の若者が置かれているという事態である。

こうした状況は、青年時代には、ある程度は、誰でも経験するところであろうが、例えば、かつての1960年代70年代の若者の場合を想起してみると、当時は、「内輪の親密圏」をただ一言で「小状況」と言い、一人一人の「小状況」を取り囲む外部世界の政治や経済の全体的な動きを「大状況」と呼んでいた。当時の多くの若者にとって、「小状況」に閉じこもる者は日和見主義と蔑まれ、どこかに「大状況」との繋がりを探し求めたものであった。当時、多くの若者にとって、「小状況」と「大状況」を繋ぐものは、学問か文学である場合が多く、前者では、マルクスとウエーバーの作品、後者ではドストエフスキーやサルトル、日本では先頃亡くなった大江健三郎や吉本隆明か、それとも江藤淳か、その周辺の作品を読みあさることによって、「大状況」の意味や構造を探し求めて、曲がりなりにも自分なりの「納得できる理解」を得て大学を卒業する者が多かった。

ところが、現代の若者には、「2つに分裂した欲求」の架け橋の役割を果たすものがない。かつてのように、社会科学や文学の古典の類いは、今では大学の授業でも読まれることは少ない。こういう傾向を前にして、大澤は、「このとき、サブカルチャーが発揮する想像力が決定的な手がかりを与えてくれる」という。さらに、かつて「小状況」を「大状況」のなかに包み込み、一つの中心軸をもった世界観を育ててくれるものは、学問や文学に関わる古典的作品であったが、それに代わって、現代では、漫画やアニメや映画などのサブカルチャーが、「2つに分裂した欲求」を架橋してくれると大澤は指摘する^[24]。

かれによれば、現代の漫画やアニメや映画などのサブカルチャーは「親密圏から〈世界〉を描く寓話」のような役割を果たしており、架橋のメカニズムを解明することによって、現代の若者が「内輪の親密圏」(小状況)からその外側の〈世界〉(大

状況)を概念的に把握する道筋を把握することができるという。

この道筋をめぐって、すなわち、サブカルチャーが現代の若者の精神状況に対して果たす論理展開を、ここで詳しくフォローする必要はない。本稿の問題関心から言えば、「二つの方向の欲望の中に引き裂かれたような状況にいる」という現代若者の存在状況を把握し、引き裂かれた欲望を架橋する可能性をもつものがサブカルチャーであるという大澤の問題設定を「真に理解する」方に重きをおきたい。

というのは、大澤の言う2つの分裂した欲求のただ中に置かれた現代の若者、この両者を一つの方向に収斂できない状況に置かれている事実こそ、30数年前にマーク・ポスターが予見した若者の姿、すなわち、かれの言う情報様式の第3の類型における主体の構成に相通ずる意味合いを有しているからである。

先にも述べたように、かつてポスターは、電子のエクリチュールの下においては、「自己は脱中心化され、散乱し、多数化され、常に不安定なまま」に主体は構成されると述べていた。「脱中心化」された主体は、もはや絶対的な時間/空間の一点に位置してはおらず、そこから何をするかを合理的に選択判断したりはしないで、不安定な状況のままに置かれていた^[25]。このポスターの予見は、当時は少なからず抽象的な物言いとの印象もあったが、30年の時間は、その抽象性を乗り越えて、一つの社会的事実として、具体的に描き出す可能性を与えたとみることができる。

そして、ここにおいて留意すべきは、1960年代70年代の若者が、「小状況」と「大状況」を架橋する装置は、言うまでもなく活字的エクリチュールであった。しかし、ネット社会としての現代にあ

って、「内輪の親密圏」と「外部の〈世界〉」を繋ぐ可能性を与えている装置は、様々な形で提供される漫画やアニメなどのサブカルチャーであり、最も重視すべきは、それらの多くを今日にあっては、電子のエクリチュールが提供しているという事実である。

9. メディア利用にみる「倒錯」的傾向

さて、若者にとって、「ごく内輪の親密圏」と「外部の〈世界〉」の両極をサブカルチャーが繋いでいるとすれば、それを提供している電子のエクリチュールへの接触、つまり、ネットメディアの利用傾向は、現在、どのような実情を示しているであろうか。既に、2015年時点で、モバイルネットの利用時間がテレビを上回り、10代20代のネット利用時間が長期化している傾向に触れたが、毎年実施されている総務省『情報通信に関する調査』をみると、まことに興味深い結果がみえる。

そもそも、現代の人々はどれくらいネットを利用しているのか。先ず【表1】は、テレビ、ネット、新聞、ラジオの4大メディアに関して、各世代の利用時間の5年毎の変化をみたものである。これによれば、2023年のネット利用時間は、全世代平均で175.2分に達し、10年前の71.6分を大きく上回っている。ほぼ2倍半の伸びである。

これに対して、テレビ視聴時間は、全体で184.7分から135.5分に減少した。2023年時点の場合、各世代を通じて、ネット利用時間の一番多い20代は、実に264.8分に達している。これに対して、60代では、103.2分、20代のネット利用時間は60代の2倍以上に達している。逆に、テレビの視聴時間については、60代が244.2分であるに対して、20代ではわずかに72.9分、60代の約3分の1に過ぎない。

【表1】主なメディアの平均利用時間(平日)ー過去15年間の推移(10代20代60代のみ)

単位：分	テレビ視聴時間			ネット利用時間			新聞閲読時間			ラジオ聴取時間		
	2013	2018	2023	2013	2018	2023	2013	2018	2023	2013	2018	2023
10代	102.9	73.3	46.0	108.9	128.8	195.0	1.7	0.3	0.9	2.4	1.5	0.8
20代	121.2	91.8	72.9	112.5	161.4	264.8	2.4	1.4	0.4	8.3	2.0	2.1
60代	263.0	252.9	244.2	33.9	38.1	103.2	35.1	25.9	17.7	27.4	17.3	16.7
全世代	184.7	159.4	135.5	71.6	100.4	175.2	15.5	10.2	6.0	16.1	10.6	8.1

(注) 総務省『情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』(H25, H30, R4年度版)より作成。

【表2】(2022年度) インターネットの利用項目別の平均利用時間(平日)

単位：分	全世代	10代	20代	30代	40代	50代	60代
メールを読む・書く	40.3	16.1	39.2	41.1	52.4	48.4	29.8
ブログやウェブサイトを見る・書く	26.4	18.7	30.7	29.2	33.7	27.4	14.8
ソーシャルメディアを見る・書く	43.3	64.2	87.3	48.2	38.6	26.6	17.4
動画投稿・共有サイトを見る	51.0	91.1	99.9	57.1	38.9	28.7	25.4
VODを見る	15.7	20.3	28.7	16.2	14.8	11.9	7.8
オンラインゲーム・ソーシャルゲーム	19.9	36.9	54.4	20.5	12.9	5.9	7.0
ネット通話を使う	4.8	19.0	10.5	1.1	1.7	3.5	1.2

(注) 総務省『情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』(R5年度版)より作成。

【表3】(2021年度) マスメディア並びにネットの利用項目別にみた信頼度

単位：%	信頼できる	半々くらい	信頼できない	利用していない
テレビ	52.8	28.2	13.9	4.1
ラジオ	50.9	28.7	8.2	12.2
新聞	61.2	20.8	9.0	9.0
雑誌・書籍	37.5	42.5	11.0	9.0
ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)	15.3	42.8	27.5	14.4
メッセージングサービス	18.8	44.5	22.8	13.9
ポータルサイトによるニュース配信	41.8	39.3	12.3	6.6
ニュース系キュレーションメディア	29.7	38.8	14.3	17.2
ニュース以外のキュレーションメディア	17.3	41.1	25.3	16.3
専門情報サイト	45.3	36.7	10.4	7.6
動画投稿・共有サイト	14.4	42.4	31.0	12.2
掲示板やフォーラム	7.3	27.5	44.9	20.3
検索エンジン	43.1	42.6	9.1	5.2
ブログ等その他のサイト	10.3	40.3	30.6	18.8

(注) 「令和3年版情報通信白書」(総務省)より作成。

テレビとネットの利用時間は、20代と60代の場合で真逆の結果を示しており、いわゆる「若者のテレビ離れ」は歴然たるものがあるといえよう。そこで、1日4時間から5時間に至ろうとする若者のネット利用を中心に、一体、どのようにネットを利用しているのか、2022年のデータにより、

その実態をみると(【表2】参照)、一番多くの時間を割いているのが、20代の「動画投稿・共有サイトを見る」99.9分であった。20代は、ほぼ1時間半、動画を見ている。60代の場合も、約30分程度、動画を見ている。他に20代で目立つのが「オンラインゲーム」54.4分であるが、こうした調査

結果をみると、総じて、10代、20代の若者は、「読む書く」よりも、「見る聞く」の方が多い傾向が窺われる。

以上、利用時間と利用内容の一端であるが、これらのメディアに対して、その重要度については、ユーザーはどのように考えているのであろうか。この点につき、先の総務省『情報通信に関する調査』(2023)は、「重要なメディアは何か」という問いを設けている。それによれば、20代は「ネットが重要」と答える比率が高く(86.0%)、60代では「テレビが重要」(92.4%)とする比率が高い。20代、60代いずれも、普段よく利用しているメディアの方が「重要度が高い」と考えているわけだ。日頃よく利用するメディアほど、そのメディアを「重要である」と考える結果は、ごく当たり前の一貫性のある回答であり何の不思議もない。

ところが、総務省『情報通信に関する調査』は、重要度の認知とは別に、「信頼しているメディアは何か」についても設問している。【表3】は、その全体の結果を示したものであるが、メディアに対する信頼度は、新聞が61.2%と最も高い。次いで、テレビの52.8%、ラジオに対する信頼度も、50.9%と半数程度の人々はラジオに信頼を寄せている。

これらに対して、若者がよく利用しているメディアの信頼度をみると、「動画投稿・共有サイト」が14.4%、「ソーシャルネットワーキングサービス」が15.3%と如何にも低い結果を示している。

つまり、時代はマスメディア中心の社会からネット社会に変貌し、仕事の面はもちろん日常生活においても、今やネットの利用なくして生活は成り立たない社会になりつつあるが、メディアに対する信頼度は、マスメディアの方がネットメディアよりも依然として高い現状にある。

この点について、年代による相異を見るデータは準備していないが、先に見た利用度との相関で見ると、若者の場合は、「信頼しているメディアに対しては利用度が低い」が、逆に、「信頼していないメディアに対しては利用度が高い」。普段、一番頻繁に利用しているメディアはネットでありながら、ネットに対する信頼度は低く、普段は余り利用していないテレビの方が信頼度が高いのである。「テレビ離れ」の現象が指摘される若者の場合も、内心は、新聞やテレビに信頼を寄せながら、日頃、頻繁に利用するメディアはネットの「動画を見る」という行為に陥っているわけだ。

従来の常識では、メディアに対する信頼度と利用度との相関といえば、「自分が信頼しているメディアだからこそ、よく利用する」というパターンを考えがちである。しかし、現代の若者は、「信頼していないメディアでありながら、その信頼していないメディアを一番よく利用する」という倒錯的とも言うべき関係が、ここ近年の調査結果にみられるのである。こうした倒錯的な利用実態はおそらくメディア史上、初めて現れた現象ではないであろうか。かつてポスターが指摘した電子的エクリチュールに取り巻かれた「脱中心化した自己」の姿は、50年後の今になって現実の問題となってきたかの如くである。

10. 言語をめぐる二元論と一元論

さて、ここで再び、これまで度々触れてきた言語の指示性の問題について少しく敷衍しておきたい。言語の指示性の喪失という問題とは、*signifié*と*signifiant*の分離によって言語それ自体が本来の指示性を失った事態を指しており、これを踏まえて先の山口裕之も、現代ネット社会の言語状況をめぐって、「もはや実体をともなった〈モノ〉ではなく、それ自体としては形をもたない〈情報〉が、交換されるべき価値として流通する」^[26]と指摘したのであった。ここにおいて、現代社会の「言語」は、ひとつは、「実体をともなった〈モノ〉」を指し示す言語の系列、もうひとつは、「それ自体としては形をもたない〈情報〉」としての言語の系列とが併存していることになる。

この2つの言語形態を眼前において、そこにみられる問題性を考えるとき、筆者は、大森荘蔵の哲学で展開された言語論を想起しないわけにはいかない。何故なら、M.ポスターのいう電子的エクリチュールは、『情報様式論』序章にあるように「何も指示しない言葉」、すなわち、「*signifié*の欠落した言葉」であったが、この命題を正面から受け止めるとすれば、そこに表現される論理構成は、大森荘蔵のいう「立ち現われ一元論」に限りなく接近すると考えられるからである。

大森は、その著『物と心』の第6章に、「ことだま論一言葉と「もの-こと」と題する一文を置いている。そこでは一貫して、言葉、とりわけ話し言葉の働きについて論じているのであるが、それらを総括して、「言葉を聞いて了解される何ごとかは、「もの」や「こと」それ自身ではなく、その「表象」

であり「像」であり、一般に人々は、その「表象」や「像」こそその言葉の「意味」として理解している。この構図にはまり込む^[27] ことの危険性に注意を喚起する。

つまり、我々が日頃、見たり聞いたりして了解している「もの」や「こと」は、それ自体を了解しているのではなく、言語という記号によってある種の「像」ないし「表象」として提示された内容に対して了解しているのであって、通常、その了解の内容が言葉の「意味」に他ならないと考えている。言い換えれば、言語記号と指示対象との間に「何か純粋な中間物」を想定する傾向にはまり込む。たとえば、「ソシュールの「概念」または「所記」*signifié* は、言語と対象の間に生じた「中間物」（＝「意味」）の典型的な事例であると大森はいう^[28]。

ここにおいて、「意味」は指示対象と記号の二元論の狭間にはまり込んでいる構図になる。この二元論的構図を批判して、大森は、「立ち現われ」一元論を提唱する。つまり例えば、今、東京にいる「私」が、ふと京都の賀茂川を「思い浮かべた」とする。この情景を、二元論的構図からいえば、「私」に「思い浮かべられた」賀茂川は、京都を貫いて流れている「対象」としての賀茂川の「表象」であるということになる。しかし実際に、「私」は、東京に居るわけだから、京都の賀茂川という「対象」を知覚しているわけではない。その賀茂川は、「画に描いた餅」と同様、触れることのできない「頭に描いた賀茂」に過ぎない^[29]。

ここで、大森は、次のような別の構図を描く。

「本物の賀茂川は二つの仕方でわたしに**じかに**「立ち現われる」。「表象」なるものを「通して」ではなく、**じかに**である。一つの立ち現われ方は、知覚的に立ち現われる仕方である。賀茂がその立ち現われ方をするのは「私」が賀茂のほとりに居り、肉眼で眺め、あるいは手を入れてその水に触れる場合である。それに対して今一つの立ち現われ方は、今のように「私」が遠く離れて賀茂を「思う」ときの立ち現われ方で、その場合は見たり触れたりできない、つまり知覚できない。知覚的立ち現われに対して、この思いの立ち現われの根本的性格は今述べたように、知覚できない、知覚していない、という点にある。」^[30]これを端的に図示すれば次の通りになる。

二元論構図

知覚「表象」……対象の**知覚的**立ち現われ
非知覚的「表象」…対象の**思いの**立ち現われ

一元論構図

この場合、「二元論では二元論である限り、「対象」は「表象」を「通して」のみ現われると見るに對し、一元論では、「表象」のような仲介者なしに「対象」は**じかに**立ち現われる^[31]。知覚現場に自ら身を置いている場合は、「対象の知覚的立ち現われ」、知覚現場からは離れている場合は、「対象の思いの立ち現われ」と区別する。しかしこの両者いずれも、言語と対象との間に生じる「中間物」としての *signifié* は介在せず、対象がそのまま**じかに**、「立ち現われる」というのが「立ち現われ」一元論の骨子であり、この構図が最も尖鋭的に現われるのは、「過去の想起」ならびに「未来の予期」の場合であるという。

過去ないし未来の場合は、知覚現場に身を置くことは不可能である。「思いの立ち現われ」にしかならないことは理解できるが、「知覚的」にしる「思いの」にしる、*signifié* が介在せず、「対象がそのまま**じかに**立ち現われる」とは、例えば、夢を見た時、過去の時点のある情景を夢として想起するのではなく、「夢」自体が現在に「じかに立ち現われている」と捉え、「過去」というものはそれ自体存在しない、と大森はいう。

「過去も未来も「今」において存在するのである。「今」は永遠の今であり、その「今」において、過去と未来そのものが**じかに**知覚的に立ち現われているのである」^[32]。

いささか奇妙なレトリックではある。このレトリックを「奇妙」と感じるのは、その種の人々が、言葉と対象との二元論的世界に棲息しているからである。大森自身の認識世界では、何ら奇妙ではない。大森のいう一元論構図においては、「言葉があつて、実在がある」、「現象があつて実在がある」とは考えない。「存在するものとは感覚されるものである」という命題を提起した中世の哲学者ジョージ・バークリーと同じように、まず感覚の方が優先的に現われ、言語と実在、概念と実在の区別を否定して、「感覚の向こうに物が実在する」とは解しない。あるのは、ただ「感覚」だけ、というのが一元論的世界の構図となる。

大森によれば、「もの」も「こと」も存在せず、あるのは先ずはそれらに対する「感覚」であつて、

「見たり」「触れたり」ということが優先する、その後、「自我」とか「主体」が構成される、と考えるわけである。西田幾多郎のいう「純粹経験」の概念もまた、この系列に属するとみることができるが、西田との対比で考えれば分かりやすいかもしれない^[33]。

1.1. 結・一元的言語世界への転回

以上にみた大森の一元論構図は、しかし、若干の理論的変容があった。この「立ち現われ」一元論を提唱した当初は、「二元論の構図は世界と人間に対する見方を根幹的に拘束する構図である。(中略)この二元論の構図が誤っているとは言わない。しかし、適切でないと思うのである。(中略)「対象」と「表象」や「意味」との対立を、「物」と「心」の対立を、強いコントラストで際立たせるには適切な構図であろう。しかし、危険なのはそれが唯一の構図であると思ひこむことである。その構図に鎖でつながれ釘付けになることである。」^[34]と述べていた。

「立ち現われ」という用語が初めて登場したのは、論文「ことだま論」が発表された1973年ということであるが^[35]、その3年後、この論文が『物と心』に収められた際には、大森自身、「誤っているとは言わない。しかし、適切ではない」という文言を撤回し、「今では私は誤りだと言いたい。「表象」という概念は論理的に空虚であると思われる。」との(注)を付して、すべて一元論に徹する方向に自らの方向性を定めていた。

つまり、「二元論と一元論の共存」の構図で考えるか、それとも、「一元論のみ」の構図で考えるか、あるいは、「二元論のみ」の構図で考えるか、我々に与えられた思考の選択肢は、この三つが存するわけである。そこで本稿を閉じるに当たって、筆者は、初期大森哲学の考え方、すなわち、「二元論と一元論の共存」の方向を選択したい。

なぜなら、今日の社会、とりわけ、これまで述べ来たった「電子的エクリチュール」の溢れる現代ネット社会の言語状況を考察しようと試みる場合、まさに、初期大森の言うように、「二元論構図に基づく言語」と、「一元論構図に基づく言語」の二種類が混在していると考えることが出来るからである。

その二種類とは、既に言うまでもなく、ひとつは、「実体をともなった〈モノ〉」を指し示す言語の

系列、もうひとつは、「それ自体としては形をもたない〈情報〉」としての言語の系列に他ならない。実体が存在し、実体を指し示す言語の系列においては、人々は、signifiéとsignifiantと指示対象の三つを言語記号の基本的構成要素とし、それらの相互関係の中で意味機能を考えるのが一般的であった。他方、「それ自体としては形をもたない」、つまり実体を伴わないゆえに、signifiéの喪失した言語系列においては、言語の意味よりも、一人一人の感覚が優先し、一人一人の「思い」が先立って、大森の言う「思いの立ち現われ」一元論の世界に転回してしまうのである。

本稿の基調底音においているM.ポスターの言う「何も指示しない言葉」もまた、signifiéという仲介者なしの言葉である故に、電子的エクリチュールの様々な様相も、「思いの立ち現われ」ということになる。

今日、社会問題となっているネット上での誹謗中傷問題や、フェイクニュース、ヴァーチャルリアリティ、そして若者を惹きつけて止まないアニメの世界等々、それらが指示する事実などありはしないのである。現下に起きつつある問題は、二元論的言語世界での「主体の構成」から、一元論的言語世界での「主体の構成」への転回にあると言わねばならない。

注

[1] 勿論、新聞で読むニュースとネットで読むニュースの内容が全く同じというのではない。新聞でニュースを「読む」場合とデジタル文字でニュースを「読む」場合の差異については、拙稿「ネット社会における『読む』という行為の変容—メディアの差異性とテキストの同一性をめぐって」(大妻女子大学紀要『社会情報学研究 20』2011.)において論じた。また、同『読む』という行為にアルケオロジー—『言語と事実の距離』をめぐって

(同紀要『社会情報学研究 24』2015.)。同「インターネットの普及とニュースの受容」(前納弘武・岩佐淳一・内田康人編著『変わりゆくコミュニケーション/薄れゆくコミュニティ』所収、ミネルヴァ書房、2012.)をも参照されたい。

[2] E.L.Eisenstein, 1984, *The Revolution in Early Modern Europe*. (別宮貞徳訳, 1987, 『印刷革命』, みすず書房.)

[3] Benedict Anderson, 1983, *Imagined Communities*, Verso:London. (白石隆・白石さや訳, 1987, 『想像の共同体』, リプロポート, 特に「第III章国民意識

の起源」を参照.)

- [4] Andrew Pettegree, 2010, *The Book In The Renaissance*, Yale University. (桑木野幸司訳, 2017, 『印刷という革命』, 白水社, p.66.)
- [5] ペティグリー, 前掲訳書, p.559.
- [6] Jurgen Habermas, 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der burgerlichen Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag. (細谷貞雄・山田正行訳, 1994, 『第2版公共性の構造転換』, 未来社, pp.iii-iv.)
- [7] Neil Postman, 1985, *Amusing Ourselves To Death*. (今井幹晴訳, 2015, 『愉しみながら死んでいく』, 三一書房, pp.120-121.)
- [8] Mark Poster, 1990, *The Mode Of Information*, Blackwell Publishers, Oxford. (室井尚・吉岡洋訳, 2001, 『情報様式論』, 岩波現代文庫.)
- [9] 大澤真幸「解説・現代的転回を検出する橋頭堡」, M.ポスター, 前掲訳書所収. p.365.
- [10] 大澤真幸, 前掲訳書, pp.365-366.
- [11] 大澤真幸, 前掲訳書, p.366.
- [12] マーク・ポスター, 前掲訳書, p.33. 以下, 本書からの引用については, 本文中に頁数を示す.
- [13] 井筒俊彦, 1985, 『意味の深みへー東洋哲学の水位』, 岩波書店, p.151.
- [14] 井筒俊彦, 前掲書, p.139.
- [15] 井筒俊彦, 前掲書, p.139.
- [16] Jacques Derrida, 1967, *De la grammatologie*, Les edition de Minuit. (足立和浩訳, 1972, 『根源の彼方にーグラマトロジーについて 上』, 現代思潮新社, p.27.)
- [17] ジャック・デリダ, 前掲訳書, p.27.
- [18] 「カズオ・イシグロ語る『感情優先社会』の危うさ」 (<https://toyokeizai.net/articles/-/414929>)
2024年6月24日閲覧.
- [19] 前納弘武「マスメディア中心の社会からSNS中心の社会へ, あるいは, 情報社会から情動社会へ」(2017年3月11日『社会情報学部の四半世紀』

での講演. 大妻女子大学社会情報学部主催).

- [20] 山口裕之, 2022, 『現代メディア哲学』, 講談社, p.25.
- [21] 山口裕之, 前掲書, p.26.
- [22] 橋元良明, 2021, 「便利な端末が私たちにしていること」, (『世界』2021年7月号) 参照.
- [23] 大澤真幸, 2018, 『サブカルルの想像力は資本主義を超えるか』, KADOKAWA, pp.3-4.
- [24] 大澤真幸, 前掲書, p.4.
- [25] マーク・ポスター, 前掲訳書, p.13.
- [26] 山口, 前掲書, p.25.
- [27] 大森荘蔵, 2015, 『物と心』, ちくま学芸文庫, p.169.
- [28] 大森, 前掲書, p.169.
- [29] 大森, 前掲書, p.172.
- [30] 大森, 前掲書, pp.172-173.
- [31] 大森, 前掲書, p.174.
- [32] 大森, 前掲書, p.175.
- [33] 西田幾多郎, 2012, 『善の研究』, 岩波文庫.
- [34] 大森, 前掲書, pp.170-171.
- [35] 野矢茂樹, 2015, 『大森荘蔵ー哲学の見本』, 講談社学術文庫, p.95.

付記

本稿は, 大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト(炭谷晃男代表)の研究助成を複数年度に渡って受けてきたものの成果を集大成したものである。以下に, 各年度の報告書の題名を記して謝意を表したい。平成30年度「ことばの二面性についての研究ー声と文字に関する基本的考察」, 令和2年度「電子文字社会における『ことば』の変容に関する研究」, 令和3年度「エクリチュールの社会学の構想ーメディア論からエクリチュール論へ」, 令和4年度「『エクリチュールの変容』と『知の変容』に関する研究」.

Abstract

The opportunities for people today to come into contact with the so-called ‘printed word’ have been drastically reduced, and the majority of people now read electronic text displayed on the screens of smartphones and computers. In this paper, we consider electronically displayed text as ‘electronic écriture’ and consider its influence on human development, in other words, on the constitution of the subject. In electronic écriture in the so-called net society, there are many cases in which not only text but also images, photographs, sound and short-story videos are integrated together to form a single expressive object. In contrast, print écriture consists only of a single medium, the written word, and although photographs may accompany some of it, there is no room for audio, video or moving images. The difference between the two is not only a matter of the technological evolution of the medium of communication, but should also be seen as forcing the recipients to have a completely different ‘linguistic experience’, and the task of this paper is to argue for the social fact that different linguistic experiences require different compositions of the subject. This approach was actually proposed by Mark Poster in his book ‘Information Styles’ more than 30 years ago. By examining some of the empirical studies on the former poster's problem of the ‘constitution of the subject’ under contemporary electronic écriture, we can see that what he pointed out more than 30 years ago has now come to show aspects of reality. This paper attempts to discuss the background and history of this phenomenon.

(受付日：2024年9月18日，受理日：2024年10月11日)



前納 弘武 (まえの ひろむ)

現職：大妻女子大学人間生活文化研究所特別研究員

プロフィール：

1975年，中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程満期退学。専門は，社会学，社会情報学。特に，メディアと社会変容の関連を主題とする。日本社会情報学会名誉会員。2016年より，大妻女子大学名誉教授。退職後は，江戸後期から幕末社会の研究に関心を広げている。

主な著書：

- 『離島とメディアの研究—小笠原篇』(編著，学文社，2000年，科研費出版助成による)
- 『変わりゆくコミュニケーション薄れゆくコミュニティ』(編著，ミネルヴァ書房，2012年)
- 『山口彦次郎関連文書集成』(共著，Otsuma e-Book，2018年)
- 『竹斎と海舟』(単著，私家版，2021年)